

電子ジャーナルによる医学分野外国雑誌の利用形態に及ぼす影響

群馬大学附属図書館情報管理課
医学分館情報管理係 齋藤初巳

1. はじめに
2. 大学図書館における電子ジャーナルの現状
3. 群馬大学における医学分野外国雑誌の利用状況
4. おわりに

図 1. Impact Factor からみた電子ジャーナルの提供状況

図 2. 群馬大学医学分館所蔵雑誌と電子ジャーナルの重複率

図 3-1. 文献複写サービスにおける電子ジャーナルの該当率（全体）

図 3-2. 文献複写サービスにおける電子ジャーナルの該当率（1996 年以降）

1. はじめに

ここ数年、インターネットの発展に伴い、様々な形態の電子ジャーナルが、次々と学協会や商業出版社および関連機関から提供されている。それに伴う議論も出版社側の主導で展開されている。図書館は、そこから送り出されるサービス、状況変化をフォローするだけの状態である。その受動的な行動は、出版社側の競争の激化による購読者数の維持する手段にうまく利用されてしまっているということになりはしないだろうか。このような状況の中で大学図書館でも本格的な対策が始まっている。雑誌価格の高騰に加え、予算の低い伸びも重なり、外国雑誌の購入選択がますます重要となっている。その中で図書館員は、利用者のニーズに対して迅速に正確に対処していかなければならない。電子ジャーナルは、その実現のために大きな役割を担っていくと思われる。

ここでは、電子ジャーナルをめぐる大学図書館の最近の状況を踏まえた後、筆者が勤務している群馬大学附属図書館医学分館の医学分野外国雑誌のデータをもとに電子ジャーナルが、今後の利用形態にどのような影響を及ぼしていくのかを考察していきたい。

2. 大学図書館における電子ジャーナル導入の現況

現在のようなインターネット上での学術雑誌の提供は、1992年のOCLCの Electronic Journal Online が初めてとされている。米国で「電子ジャーナルの年」とされている1996年には、電子ジャーナルが学術出版社、学協会、複数の出版社から包括的に提供する総合サービス (Aggrigeter) などが相次いで提供され、現在の実用化に至っている。

日本では、学術情報センターによって1997年4月から日本の学協会誌のフルテキストが提供され、現在では300誌タイトルに及んでいる。

長岡技術科学大学では、1997年4月から東京工業大学との間で、Elsevier社のEES(Elsevier Electronic Subscriptions)の共同利用を開始した。また、1998年4月から、全国10の高等専門学校との間で Academic Press社のオンラインジャーナルシステム IDEAL を共同利用している。その他にも以前から行っていた外国雑誌目次データベースの共同利用をバージョンアップさせ、「新外国雑誌目次データベース」として全国54の高等専門学校と共有している。分野別、地域別のコンソーシアムの試みが行われている。

また、1995年4月にTAC(多摩アカデミック・コンソーシアム)が、東京の多摩地区に所在を持つ国際基督教大学、東京経済大学、津田塾大学、国立音楽大学の4大学によって創設されている。それぞれのユニークな学部構成と主題分野を活かした共生する大学連携を目指して、4館間の資料の相互利用、OPACの公開、複写料金の無料化などの活発な活動を続けている。

このような進展のなかで、1998年1月には、「電子ジャーナル・フォーラム」が開催され、電子ジャーナルの開発、提供、利用をめぐる大学図書館側と出版社側の現状についての情報交換、意見交換も持たれている。

1998年3月～5月にかけて、九州地区の15の国立大学で「地域共同サーバによるデータベース共同利用実験」を行っている。引用情報の世界的なデータベースである Web

Science を格納して、教官・学生に自由に利用してもらおう実験であり、利用者からの評価も高く、一定の成果をあげている。地域別のコンソーシアム的活動の実験といえる。

以上のような積極的な取り組みと比例して、国立大学図書館における現在の電子ジャーナルの受入状況は、学術情報センターによる 1998 年 10 月に実施した「電子ジャーナルの整備に関するアンケート」によると 98 館中 69 館で約 70%が何らかの形で導入している。どの大学においても電子ジャーナルを広く受け入れていることが読み取れる。

こうした状況から国立大学図書館協議会では、組織的に検討すべきであるという共通認識を持ち、電子ジャーナル検討ワーキンググループが本年 5 月に設置され、今後の電子ジャーナルへの集中的な検討がなされることが了承された。まず、急務として Elsevier 社が、提供する SD-21 プロジェクトについての合意書を作成し、具体的な提案がされた。8 月に行われた導入状況調査では、62 館中 41 館（66%）が導入済みあるいは導入予定となっている。電子ジャーナルを本格化するための経費モデルの検討や ILL への影響などの調査を実施しながらコンソーシアムへの可能性について検討が行われている。

既にさまざまなコンソーシアム的活動も行われているが、本格的な実現のためには未だ問題が残されているのが現状である。今後の実現までの過程においても常に利用者側を意識した対処が必要であろう。

3. 群馬大学における医学分野外国雑誌の利用状況

群馬大学附属図書館医学分館（以下、“本館”とする）では、共通性の高い外国雑誌を Core Journal として 5 年間毎に見直しを行っている。1998 年の見直しでは雑誌価格の高騰も伴い、雑誌ワーキンググループを設置し、大幅な見直しを行なった。見直しの結果、約 30 誌の購読雑誌の中止が決定され、今年度は、305 誌を購入することに落ち着いた。この選択時には、JCR の Impact Factor や本大学関係者の論文掲載数、ILL の依頼件数などの様々な面からの選択を実施した。しかし、本館では、医学部の 45 の講座、保健学科の 75 人の専門教官、さらに生体調節研究所などの実験施設が設置され、広い医学分野の情報が必要とされており、利用者の多様なニーズに対応するには、困難な状態となってきた。こうした状況は、本館だけでなく、他館でも同様であると推定される。今後の電子ジャーナルの新たな展開を前に、電子ジャーナルが今までの利用形態にどのように役立てられるのかを以下の点から改めて検討しておきたいと思う。

3.1 Impact Factor からみた電子ジャーナルの提供状況

はじめに JCR の Category を医学分野に絞り、約 2,000 件を抽出した。その中の上位 300 位について Impact Factor の値が高い雑誌を利用度の高い雑誌と見なし、50 位毎にグループ分けを行い、電子ジャーナルがどの程度提供されているのかを検証した。ここでは、医学分野が各専門分野によって、引用件数の値に大きなばらつきが有ることも考慮し、比較的広範囲の Category によって作業を行った。また、各雑誌について、所蔵館数の平均値を計上し、図書館間での重複状況についても併せて検証した。

図 1 においては、各グループ毎に本館の所蔵件数、電子ジャーナルの提供件数、他機関の所蔵館数（平均値）を表したものである。

まず、自館の所蔵件数は、154 件で全購入雑誌数の約 51%に該当する。これをグループ毎に見てみるとどの値も約 50%該当となっていて広範囲の分野に平均的に所蔵していると言える。自館・他館共に Impact Factor に沿った値とはなっているが、他館の所蔵館数の上位 50 位までの高い順位では、約 150 館もの機関が所蔵しており、機関間の重複が多いことがわかる。電子ジャーナルにおいては、Impact Factor の順位に関係なく、ほぼ平均的に 60%ほどの提供がされていることがわかる。

次に図 2 においては、本館の上記で求めた所蔵雑誌に対して電子ジャーナルの提供がある雑誌の件数を計上し、その重複率を表したものである。

平均 70%という高い重複率であり、満遍なく電子ジャーナルが浸透していることが判明した。

このことによって、電子ジャーナルはカバー率が高く、利用者にとって情報を入手するための有効な手段の一つであることがわかる。重複が多い雑誌については、電子ジャーナルによる画面上で共同利用の方法が有効であろう。電子ジャーナルの特徴である、複数の利用者が自由な時間、自由な場所で同じ情報を入手できるという利点を生かし、冊子体での欠号や製本中での利用不可という不運に嘆くことはなくなるのである。しかし、この調査にあたっては、出版社 1 社だけではなく、数社を検索しての結果であり、One Stop Shopping にはほど遠い作業であった。利用者が直ぐに知りたい情報へ辿りつけるようなサービスが必要である。

3.2 ILL による電子ジャーナルの代替状況

本館の文献複写サービスにおいて、学術情報センターで提供されている ILL システムでの文献複写サービスが電子ジャーナルによってどれだけ軽減されるかを検討していきたいと思う。

図 3-1,2 においては、本館の今年の 4 月から 7 月までの ILL システムでの文献複写サービスの主要な出版社 4 社分の依頼分全 1,608 件中の 1,268 件（約 79%）、受付分全 1,449 件中の 1,038 件（約 72%）を抽出し、電子ジャーナルで提供できるか否か該当率を示したものである。

図 3-1 において、該当率を見てみると多少出版社において、ばらつきはあるが、平均 55%の該当率となった。図 3-2 の 1996 年以降に発行された文献については、平均 95%と高い該当率であった。

このことによって、電子ジャーナルによってほぼ入手可能と考えられる。ILL の業務の軽減は、見込めると推定される。文献の入手が、数日後ではなく、その場で利用者が画面上から入手できるのである。ただ、医学分野では、最新情報のニーズが多い分野とも言えるものの、1996 年以前のニーズも半分近くを占めていることもわかった。幅広いニーズに対応するためには、今後、供給者側でどの程度のバックファイルが維持できるのか、何年間の保存ができるのかが大きな鍵であろう。

今回の 3 項で行った検証について利用した出版社について、その特徴を以下に記して

おく。

各出版社でも電子ジャーナルの契約や利用方法の一元化を目指し、総合サービスの提供に変化してきている。

- OCLC <<http://www.oclc.org/oclc/menu/home1.htm>>
OCLC の EOC(electronic Collections Online)は、Academic Press や Kluwer 等 30 社と提携し 1,200 誌の電子ジャーナルが統一のインターフェースで利用できる。これらの電子ジャーナルを統一したインターフェースで利用できる。OCLC 自信のサーバを持っているため、データへのアクセス管理が一元化できる。
- Silver Platter <<http://www.silverplatter.com/>>
Silver Platter の Silver Link は、同社の持つ二次資料 ERL (Electronic Reference Library)で検索された文献から各出版社の電子ジャーナルへ論文レベルでリンクを提供する。
- Ovid Technologies <<http://www.ovid.com/>>
Ovid は、Journals@Ovidを通して医学関係雑誌 80 誌の提供を開始した。これまでの Ovid Full Text にかわるものと考えられ、50 以上の出版社数百誌の提供を目指している。これらは MEDLINE 等とリンクしている。
- Elsevier <<http://www.elsevier.com/>>
Elsevier 社の発行する約 2,000 誌の雑誌を提供する。同社の作成する医学データベース EMBASE とリンクする。Science Direct 内の引用文献は、相互リンクされている。
- Academic Press <<http://www.apnet.com/>>
1996 年より 175 タイトルを対象にサービスが開始された IDEAL は、現在約 200 誌に増えている。更に、医学系の重要タイトルを刊行している米国の出版社 Mosby のタイトル 50 誌が、2000 年より順次オンラインサービスされる見込みである。
- Springer-Verlag <<http://www.springer.de/>>
Springer Verlag では、電子ジャーナルサービス LINK で約 300 誌 (400 誌予定)を現在冊子体購読者に限り無料でアクセスできる。認証はパスワード、または IP アドレス (機関) である。
- John Wiley <<http://www.interscience.wiley.com>>
Wiley 社の約 150 誌のタイトルが提供(400 誌提供予定)されており、1997 年以降の全文が収録されている。

各社の電子ジャーナルが、一つの総合サービスの下にまとまることは、各社の利害も絡んでくるので不可能なことのようである。出版社のサービスの特徴を念頭に置き、利用者のニーズをより多く実現できるものを選択し、利用のしやすい画面構築を目指していかなければならない。

本学のホームページには、オンラインジャーナルの頁が設けて有り、外国雑誌について、フルテキスト無料公開中の雑誌が 59 誌、Contents・Abstracts など 1 部公開中の雑誌が 476 誌、出版社とリンクされているものが 21 件となっている。今後、登録数を増やし、様々な主題の関連論文とのリンクづけや画面表示の方法などを考えて充実したものとしてきたい。

前項で述べた Elsevier 社提供の SD-21 との合意を 8 月に行った。そして 9 月 27 日には、説明会を実施した。参加人数は 17 名と日中の実施にもかかわらず多くの参加が得られている。利用者の方が電子ジャーナルに積極的な態度を示している。

4. おわりに

図書館員は、電子ジャーナルによって情報が画面上から入手できる状況となってきた現在、利用者のニーズを的確に把握し、それを生かした積極的なサービスをすることが必要である。

個々の機関の問題としてではなく、大学図書館の枠に縛られない一つの大きな組織で対応していくコンソーシアムの実現に期待しつつ、とどまることのない利用者へのニーズに対処していきたい。

最後に本レポートの作成にあたり、貴重な助言、データの提供を賜った学術情報センターの皆様へ深く感謝いたします。

* 参考文献

1. 中川真紀、大原寿人. オンラインジャーナルの利用と問題. 情報の科学と技術. Vol.47 No.2 p.81-85 (1997)
2. 長塚隆. 医学の電子ジャーナルの今. 医学図書館. Vol.45 No.2 p.194-200 (1998)
3. 城山泰彦. Impact Factor 値を用いた蔵書構成評価: 臨床雑誌編. 医学図書館. Vol.45 No.1 p.88-96 (1998)
4. 中谷俊介. 電子ジャーナルに残された課題. 薬学図書館. Vol.43 No.3 p.362-367 (1998)
5. 時実象一. 学術系電子雑誌の現状. 情報管理. Vol.41 No.5 p.343-354 (1998)
6. 電子ジャーナルの導入をめぐって(シリーズ・電子ジャーナル 2). 筑波大学図書館報. Vol.25 No.2(1999)
7. 尾城孝一. 電子ジャーナルの導入とサービス: 大学図書館における課題. 薬学図書館. Vol. 44 No.3 p.217-226(1999)
8. 尾城孝一、細川真紀. 大学図書館における電子ジャーナルの利用と問題点. 医学図書館. Vol.45 No.2 p.201-210(1998)
9. ヘーゼル・ウッドワードほか. 電子ジャーナル: 神話と真実. 情報の科学と技術. Vol.48 No.5 p.303-311(1998)

10. 甲斐重武. 国立大学におけるコンソーシアムの活動の胎動 : 九州地区におけるデータベース Web of Science の共同利用実験を例にして. 大学図書館研究. No.55 p.7-15(1999)
11. 関根三則. コンソーシアムへの展望 : その実例を中心として. 大学図書館研究. No.55 p.17-23(1999)
12. 松下鈞. TAC(多摩アカデミック・コンソーシアム) : 新しい図書館協力の試み. 大学図書館研究. No.55 p.1-6(1999)
13. 平吹佳世子. 電子雑誌記入事例 : 慶應義塾大学医学メディアセンターにおいて. 第6回医学図書館研究会「21世紀への模索」発表論文より(1999)

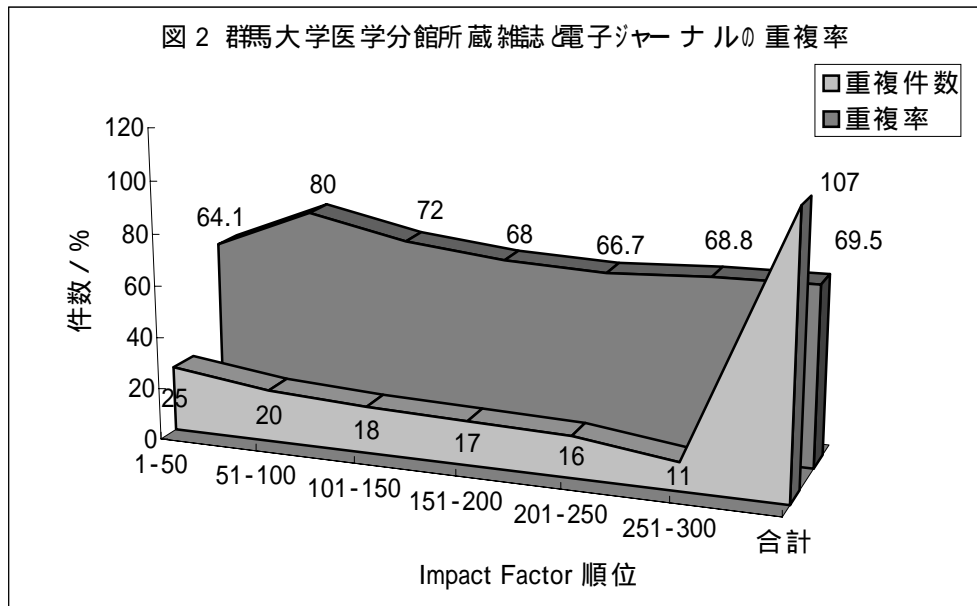
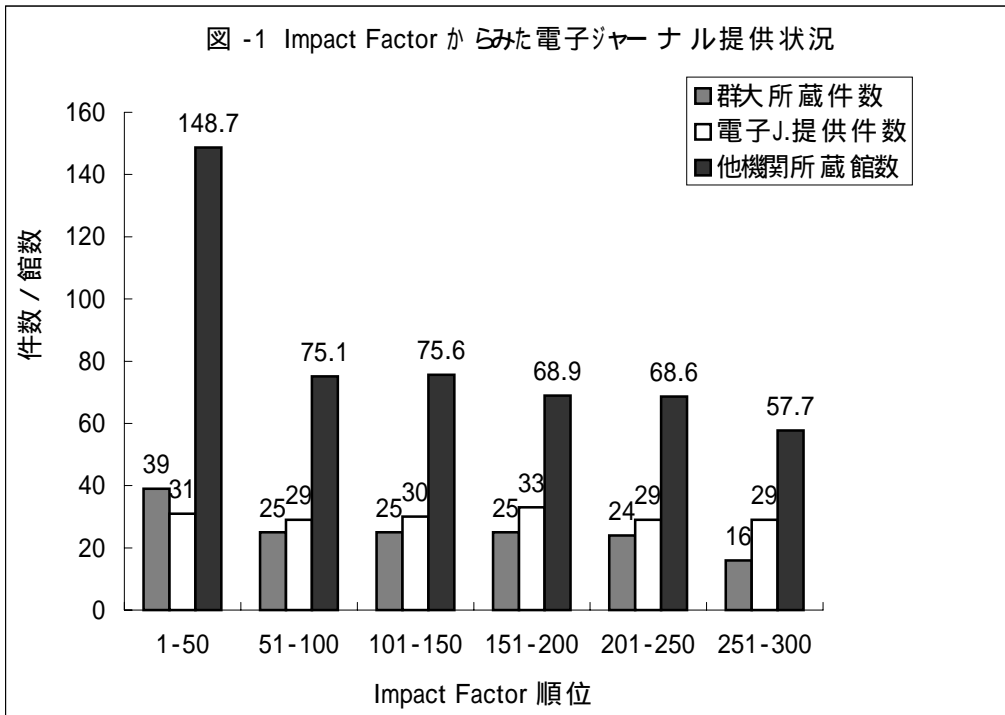


図 3-1 文献複写サービスにおける電子ジャーナル該当率(全体)

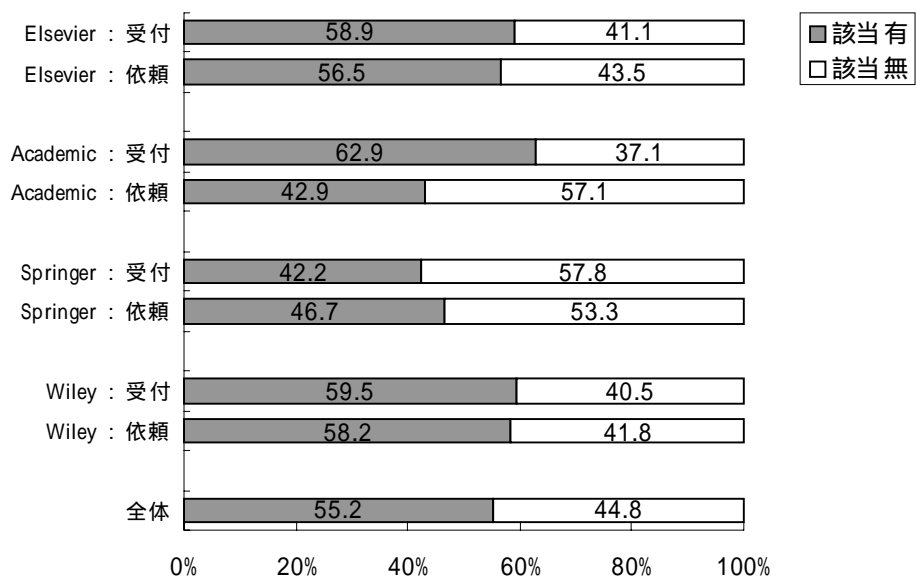


図 3-2 文献複写サービスにおける電子ジャーナル該当率 (1996年以降)

